常設展示「縁側にて」/ Exhibition “at Engawa”

《anitoya cursing skateboard》2022、2023
齊藤勇樹 (anitoya) / Yuki SAITO (anitoya)
朴木 / Magnolia（2022）、ホワイトアッシュ / White ash（2023）

生粋のスケーターであり現在はサーファーとして地元のいわき市を拠点に活動する齊藤は、板に乗ることで「自由」を表現します。地球から生み出されたエネルギーと生命を宿した「板」に乗ることで、地球とつながり、自由になれると齋藤は言います。材木の性質と木目が生かされた美しい流線形を描く本作品は、特注のかんなややすりで徹底的に磨き上げられており、自然が内包する強さや美を象徴しているようです。機能性にも優れており、本作品にはトラックとウィールを取り付けることが可能です。乗り手はその「板」に乗り、身を委ね、ゆったりと地球をクルーシングすることができます。素朴の意も持つ柔らかい朴木を使用した 2022 年の作品と、粘りのある硬さを持つホワイトアッシュを使用した 2023 年の作品は、どちらもまるで縁側の家の一部のようです。

《習作群 竹工芸 / Bamboo Crafts》 2016-
高橋 瑛 / Akira TAKAHASHI
真竹 / Madake - Japanese timber bamboo

縁側の家の先代の孫娘で美術商（一番星画廊）の熊谷正子がこの家に暮らしていた当時から、縁側の家に隣接する竹藪は今もその西の窓に美しい影を届けています。高橋（父）は身近な竹を用い、庭に竹垣を、室内ではカゴやザル、ランプシェードやオットマンにまで変貌させ、縁側の家の空間を豊かなものにしています。このように縁側の家のあらゆる道具をつくる丁寧な仕事は竹細工のみならずピザ窯やコンポスト鉄器の設計から制作にまで広がります。渓流釣りの季節が終わり秋になると高橋は竹の伐採を始めます。その後に油抜きや天日干しなどの下処理を経て荒割りへ。そして何度も割を重ねて整え、ちょうど冬を迎える時期にヒゴが出来上がります。高橋は薪ストーブのある暖かな丸太小屋にこもり、竹ヒゴを編んで冬を過ごすのです。春になれば、各々の用途に適した形で編み込まれ、美しい模様をもつカゴやザル、竹垣、藤棚、背負籠、農具、漁具などがうららかな光のもとに現れます。

《　　鈴 / bell》 2013
三原 聡一郎 / Soichiro MIHARA
ガイガーミューラー計数管、ガラス、モータ、マイクロチップ / GM tube, Glass, Motor, Microchip

本作は科学技術の発展した現代において、人間が知覚出来ないエネルギーを扱うことをテーマにした作品です。この作品は、風鈴の起源とされる、邪気を捉えて払うために吊るされたといういわれをモチーフとしています。人の知覚外にある存在は、その性質ゆえに畏れという感情を喚起しますが、知覚できるものに（理屈上）転化することで、その畏れを克服しようとしました。しかし科学的に捉えられるエネルギーであることが分かった現在でも、緊張感をもって数値に臨むことが多いでしょう。この作品の根幹はリアルタイム・センシングです。世界各地で現在進行形である本テーマを、メタファーや痕跡を越え、実際の計測に基づき捉えようとしています。ガラスドーム越しに不規則に聞こえてくる鈴の静かな音に耳をすますと、世界との向き合い方についてあらためて考えるきっかけになるでしょう。

《Beachcombing with John and Friends》 2023 (2016-)
アバロス村野敦子 / Atsuko Murano ABALOS
写真集、アクリル２層 組写真、釣りの浮き（漂流物）、貝殻 / Photo book, Double layerd aclyric photo ojbect, Fishing float(Flotsam), Sea shells

本作は写真集 Beachcombing With John を起点に縁側の家で生まれたインスタレーションです。北米太平洋側の漂着物には東日本大震災時に日本から流れてきたと認識されているものがあります。村野はそのことを知り、ワシントン州オリンピック半島で 40 年以上も浜に通う John を尋ねることになります。写真集はその現地の漂着物と John を訪う光景が収められています。阪神大震災での被災、そして東日本大震災をシンガポールで体験したことによる当事者性の意識を基に、昨年の縁側の家での体験を経て、写真集に幾つかのオブジェクトを加えた展開を試みています。日本の岩沢海岸と北米の海岸の写真を重ねたオブジェクト、そして添えられた beachcombing with friend と John が記した漂流物、岩沢海岸の貝殻を含め、「タイムマシーン」と語られた海の時間と繋がりを 2 つの浜から壮大に想起させてくれます。

《縁側の家のための詩 / Poem for engawanoie》 2023
小宮りさ麻里奈 / Marina Lisa KOMIYA
縁側の家、太陽、ソーラーパネル、LED / engawanoie, Sun, Solar panel, LED

縁側の家には皆が集まる庭があります。かつてからある柿の木や道具小屋に加えて、素敵なデザインの垣根にコンポストスペースやらピザ窯が手作りで加えられてきました。ここでくり返された日常や変化はどんなものだったのでしょうか？そしてこれからは？そんな庭に新たにソーラパネルが加えられました。陽の昇っている時だけ、そのエネルギーの源である太陽に呼びかける言葉が灯されます。小宮がエネルギーについて思考して導かれた４つの火についての語りが自立したシステムで実装されています。縁側の下でひっそりと流れてゆく文字はあたかもこの家自体が太陽について思いを馳せながら、大きな視座でエネルギーについて語っているようです。循環的に変化する、日の出日の入りのリズムに基づいて今日もその陽の光が映し出されています。

《umarekawaru》2023
パスカル ヴィウ / Pascal VIOUT
写真 / Photos

2016 年から福島の海とサーファーを撮影するプロジェクトを継続しているヴィウは、福島が umarekawaru 様子を、自然や人の持つ明るく力強いエネルギーと共に写真に収めたいと言います。本作は「3 月 11 日に波に乗ろう」の第 1 回開催をきっかけに、東京の SLOPE GALLERY で 2022 年に発表された連作のうちの２作品です。ひとつ目の作品では暗闇に浮かび上がる東京電力広野火力発電所の煙突とたなびく煙は遠くにあり、焦点が合わずにぼんやりと不気味な気配を漂わせますが、周囲の自然と調和し大きな人の営みを感じさせます。もうひとつの作品では、荒れた海の前に立つひとりの人物に焦点を明確に合わし、それによって、周囲の風景からくっきりとふち取られたその人物は、まるでその場所にとって付けられたようです。福島の海辺に立つ構造物と人物とをそれぞれの手法で捉え、その物語へと鑑賞者を誘う作品です。